

守
対談
破
創

危機の中から未来を創る

統合の進む欧州で長い外交経験を持ち、日本には3度目の赴任となるシュヴァイスグート駐日EU（欧州連合）大使。一方、中曽宏副総裁も3度の欧州生活を含め豊富な海外経験を持つ日本銀行きっての国際派。この二人の日欧の文化・歴史等を巡る語らいの中から、危機克服のエネルギーが未来を創る様が見えてきた。



日本銀行副総裁
中曽宏
Hiroshi Nakaso

1953年 東京生まれ。78年東京大学経済学部卒業後、日本銀行入行。97年信用機構局信用機構課長、2000年信用機構局参事役、同年国際決済銀行へ転出、01年金融市場局兼国際局参事役、03年金融市場局長、08年日本銀行理事、12年日本銀行理事再任、13年3月日本銀行副総裁に就任、現在に至る。

写真 谷山 實



駐日EU大使（取材当時）
シュヴァイスグート・ディーマール
Hans Diemar Schweisgüt

1951年、オーストリア・チロル州生まれ。オーストリアと米国にて法学を学び、77年オーストリア外務省入省。首相府ラツィナ政務次官（経済調整担当）主席秘書官、公共経済・運輸省大臣官房、主席秘書官、大蔵省大臣官房、経済審議官を歴任し、87～91年まで駐日オーストリア公使、および99～2003年まで同大使、03～07年まで駐中国オーストリア大使、07～10年までEU常駐オーストリア代表、大使を務める。11年1月駐日EU大使に就任。

大きく変化した 日本の三〇年

中曾 シュヴァイスグート大使は、外交官として日本に勤務されるのは今回が三度目と伺っています。

大使 その通りです。七〇年代末に初めて旅行で日本を訪れた後、オーストリア外交官として八〇年代後半と二〇〇〇年前後に、そして今回、一一年にEU大使として赴任しました。ほぼ一〇年ごとに日本に滞在していることとなります。

中曾 三度の勤務経験を通じた、日本の印象をお聞かせください。

大使 この三〇〜四〇年で日本は大きく変化しました。

私が初めて日本に勤務した八〇年代後半、日本はバブルの真ただ中にあり、人々は楽観的な雰囲気に含まれていました。當時は、OECDが「皇居の商業価値がカリフォルニア州と同等となった」とのレポートを発表し話題になったほか、日本は米国を抜いて世界一になるとの予想も出ていましたね。

ところが一〇年後、二度目の赴任時には、バブルは崩壊し、人々は悲観的な雰囲気に含まれていました。欧州の関心もいったんは日本から中国にシフトしたように思います。足許、欧州は、中国に対する評価も冷静かつ客観的に行うようになり、少子高齢化への対応等、日本の様々な動きもすっかり関心を持ってみるようになってきていると思います。

文化大国・日本へ

中曾 私はバブル当時、逆にロンドン事務所におりましたが、日本の銀行が次から次へとロンドンに駐在員事務所や支店を設けようとするなど、日本経済の勢いをロンドンでも肌で感じていました。

ところで、当時欧州の人々の日本の文化に対する認識は、まだまだ限られたものであったように思います。今はどうでしょうか。

大使 五〇〜六〇年代は、例えば日本映画の黄金時代で小津安二郎、黒澤明らが素晴らしい作品を生み出し、欧州にも強いインパ

クトを与えました。ただ、残念ながら当時日本文化に触れるのは基本的に少数のエリート層に限られていました。日本の文化は、その後徐々に広まっていきますが、日本の経済力に注目の集まった八〇年代後半ですら、文化的な超大国ではありませんでした。

しかし、興味深いことに、現在の日本の文化的な影響力は、日本の経済的地位が非常に高かった当時に比べても、ずっと強くなっています。日本政府の「クール・

ジャパン」キャンペーンは大変素晴らしい取り組みですが、欧州では、そこまでの努力は不要と思えるほど、日本は「クール」だと考えられているように思います。宮崎駿や北野武の映画作品が多く

の人を魅了しているだけでなく、村上春樹の小説の発行部数は、欧州中で彼の作品を読んだことがない人を探すのが難しいのでは、と思わせるほどの多さです。そのほかファッション、漫画、日本食から建築といった分野まで、エリート層だけでなく幅広い層の人々が、日本の洗練された文化に魅了されています。

中曾 大使も日本の映画は実際にご覧になりますか。

大使 もちろんです。

欧州統合と 日本の不思議な縁

中曾 今のお話を伺って日本人として勇気付けられました。日本とEU双方にそれぞれの文化の流れがあり、相互に影響し合っており、この文化交流は、次世代にわたって大変重要ですね。

ところで、欧州統合の歴史を振り返ると、その背後に日欧の「人的つながり」があったことに、不思議な縁を感じます。

大使 リヒャルト・クーデンホーフェルカレルギー伯爵（一八九四年〜一九七二年）の話ですね。伯爵は、第一次世界大戦の後、一九二〇年代から、欧州統合構想の先駆けとなった「汎ヨーロッパ主義」を主張し、様々な著作・政治活動を展開しました。

彼は、オーストリア・ハンガリー帝国の外交官と日本人青山みつとの間に東京で生まれ、日本人名として「栄次郎」と名付けられました。帰国後、父が急

欧州統合の歴史

西暦	出来事
1918	第一次世界大戦終結
1923	クーデンホーフ＝カレルギー伯爵「汎ヨーロッパ」を提唱
1939-45	第二次世界大戦
1946	チャーチル チューリヒで「ヨーロッパ合衆国構想」を提唱
1949	東西ドイツ成立
1951	ECSC（欧州石炭鉄鋼共同体）発足
1957	ローマ条約（EEC〈欧州経済共同体〉条約）調印（原加盟国は6カ国）
1967	EC（欧州共同体）設立（原加盟国は6カ国）
1979	EMS（欧州通貨制度）およびECU（欧州通貨単位）開始
1985	欧州理事会、「歓喜の歌」を「欧州の歌」として承認
1989	「ベルリンの壁」崩壊、東欧革命
1990	東西ドイツ再統一
1992	マーストリヒト条約（欧州連合条約）調印
1993	EU（欧州連合）発足、単一市場スタート
1998	ECB（欧州中央銀行）業務開始
1999	ユーロ導入
2002	ユーロ紙幣・硬貨流通開始
2009	リスボン条約（欧州連合条約および欧州共同体設立条約を改正する条約）発効 欧州債務危機勃発
2010	EFSM（欧州金融安定化メカニズム）等の創設
2012	ESM（欧州安定メカニズム）発足
2013	EU加盟国、28カ国に

逝し、以後はみつに育てられました。

伯爵は、欧州統合を主張するだけでなく、その先に世界連邦も展望するなど、大変視野の広い人でした。現在ベートーベンの「歓喜の歌」が「欧州の歌」となっていますが、これも伯爵が早い段階で提唱しています。一九五〇年には、欧州統合に多大な貢献をした人に贈られるカール大帝賞を、最初に受けています。

中曾 私が伯爵の幾つかの著作を読んだ際に受けた印象として、伯爵は、第一次世界大戦の悲劇

や苦悩を目の当たりにして、欧州の再興や恒久的平和を願う思いから「汎ヨーロッパ主義」を提唱するに至ったのではないかと感じました。どうでしょうか。

東西分断の解消が加速した欧州統合

中曾 ところで、個人的なエピソードですが、私の欧州の三度の生活の最初となった六〇年代後半の少年時代、西ドイツ・ハ

ンブルクで暮らしました。父と一緒に旧東ドイツとの国境を訪れた際、のどかな草原に東西を分断する有刺鉄線が張り巡らされていましたが、そこにいた検問所の国境警備兵が有刺鉄線を指しながら「この先も同じドイツなんだよ」と言っていたことが、今もって忘れられません。その後、欧州の歴史を知るにつれ、警備兵の少し悲しい眼差しを思い出し、彼の言葉の重みをさらに感じるようになりました。

欧州統合の原動力は、警備兵の言葉に隠された、第二次世界大戦のもたらしたとてつもない

破壊、分断と、その後の人々の恒久平和を希求する気持ちだったのではないかと感じています。**大使** 私が日本に最初に赴任した八七年は、副総裁も目にされた「鉄のカーテン」が消滅する少し前ですが、その当時は、東西分断が解消されるとは、私の周囲の外交官を含めて誰も予想していないことでした。今でも、奇跡に近かったと思っています。そして、その東西分断の解消は、欧州統合の動きを大きく加速することになります。

実は、それまで欧州統合の動きは緩やかでした。当時欧州共同体は一二の加盟国により構成された、現在よりも小規模の集団でした。八〇年代後半に域内市場の統合が順調に進み、自信を深めつつある時期でしたが、当面は今の規模で、思っていたのです。しかし、八九年のベルリンの壁崩壊は様相を一変させ、もはや加盟国を増やさないことは不可能であることが明白となりました。そして、九三年発効のマーストリヒト条約（欧州連合条約）によりEU創設と



通貨統合等が進んでいき、〇二年には共通通貨としてのユーロが広く使われるようになります。ユーロへの移行は、一部の国でかなりの抵抗はありましたが、結果として非常に円滑に進み、人々のマインドも前向きになりました。

中曾 もともと欧州の人々は、自国の文化・歴史・伝統に対する愛着を持っていたと思いますし、通貨はそれらの象徴でもあります。この時期は、人々が持っているであろう思いと、他方で経済の合理化を追求することの間のバランスを上手にとる必要があった、非常にデリケートな

時期だったのでしょうか。

大使 そうですね。八〇年代後半以降、欧州憲法制定が議論され始めると、統合の取り組みは大変革をもたらすものだという意識が急速に広がってきたのです。そうした中で、「自国だけでは何も決められなくなる」といった抵抗感も大きくなりました。マーストリヒト条約の批准が英仏およびデンマークで難航したことはその表れです。

欧州債務問題を乗り越える EUそして日欧の未来

中曾 これまでEUは様々な危機を経験しながら、それを乗り越え

るたびにむしろ強化されてきました。これは驚くべきことですし、まさに「雨降って地固まる」という日本のことわざの通りです。そこで、〇九年のギリシャ危機から始まる欧州債務問題が欧州統合にどのような影響を与えたのか教えてください。

大使 EUは危機を乗り越えることで強化されてきたとの評価を頂き、ありがとうございます。日本の経営者の方々からもEUは危機を乗り越えられるとの信頼の声が多く、大変心強く感じています。

ギリシャ危機以降、EUは「対応が遅すぎるし不十分である」という批判を受けました。しかし、危機が発生してから、状況が刻一刻と変化する中、非常に難しい努力を続けて、危機対応の仕組みを構築してきたのです。ヴァンロンパイ（注）欧州理事会議長の「難破船の中で新しい船を造るようだ」という言葉は、この間の状況を良く表しています。そして、このような危機管理の結果、危機前より統合されたルールや仕組みができたことは、大きな前進でした。一方で、失業率の上昇等の負の副産

物をもたらし、人々に心理的な緊張や打撃を与えたことも事実です。重要なことは、この両者をしっかりと認識し、問題を克服していくことだと思っています。

中曾 EUが抱える課題は簡単に解決できるものではないでしょう。しかし、私自身は、EUがいずれ真の統合に向かうと信じています。大使のお話を伺いながら、実は日本も、否応なく、世界がグローバルに統合されていく過程の中にいるのだということを改めて意識しました。大使からお伺いした欧州統合に関するお話は、アジア太平洋地域の繁栄に向けて私たちに何ができるかを考える上で、非常に示唆に富む話です。若い人たちには、外の世界に飛び出し、自分たちの目でグローバル化の現実を確かめつつ、この世界を豊かで生活しやすいものとするため、大きな役割を担って欲しいと願っています。

本日は、ありがとうございます。

（注）報道などでは「ファンロンパイ」等とも表記される。